

# 二重口縁壺小考（上）

利根川 章 彦

## 1. はじめに

古墳時代前期初頭を特徴づける現象に畿内・東海の土器文化の地方波及がある。もちろん、吉備・山陰・北陸などの各地域の土器の影響が他地域に認められることも少なからずあるが、量的、質的にともに圧倒的なのは畿内および東海の土器文化である。関東地方の該期の土器は、北関東西部では「石田川式土器」、南関東では「五領式土器」であり、双方とも畿内・東海両地域の影響を色濃く受けている。細かく見れば前者は東海の影響がより強く、後者は畿内の影響がより強いように見受けられる。ただし、土器様相は実際には小地域の境界で「にじみ」の状態になっていたり、特定の集落遺跡や古墳にだけ突出して外来的な色彩の強い土器を出土する例があるなど、歴史的事情を推定するのが困難なほど複雑である。私は、このような状況が現出した事情を各地域間の双方向的交通の結果であると考えており、一部の研究者が想定するような一方的交通によって生じたわけではないと思う（註1）。ただし、この点については小稿では必要最小限の言及に留め、ここでは土器の型式学的分析を中心に論じたい。

小稿では、限られた器種として特定形態の壺形土器のみ扱う。一般には「複合口縁」・「有段口縁」・「二重口縁」などと呼ばれてきた口縁部形態を有する畿内系の壺形土器である。この土器を扱う理由はいくつかある。

第一に、この土器は通常畿内系統の土器と考えられ、しかも東北から九州まで列島の主要部のほとんどの地域に普遍的に分布するため、この土器を分析することは時代の特徴を理解することにつながると考えられることである。

第二に、その独特の器形ゆえに形態・製作技法の側面から分析する材料が豊富で、時間軸・空間軸上の変化がわかりやすいため、土器の系統的分析が他器種よりも容易に行えることである。

第三に、この土器は研究史上やや古い段階で「古墳の発生」あるいは「古墳時代のはじまり」に関連する土器として注目されていたにもかかわらず、近年の古式土師器研究においては主体が甕類の分析に移行したため、現状では研究がやや停滞気味であることである。

小稿のタイトルに「二重口縁」を採用したのは、研究史上の名称として桐原健氏（註2）の言う「二重口縁をもつ壺」などを重視したいからであるが、ここでは口縁部下端に明瞭な段をもち、上方に大きく外反して立ち上がる形態のいわゆる「有段口縁」の壺に限定している。

## 2. 口縁部接合手法の二類型

古墳時代前期の二重口縁壺形土器の分類について一つの試論として口縁部接合手法をまず取り上げておきたい。口縁部を擬口縁部に接合する手法については従来あまり顧みられたことがなかった。

しかし、土器の系統的解釈に何らかの手がかりを与える可能性があるものと考えられるので、ここであえて論じておく。

結論的に述べてしまうと、大きく二つの手法を指摘できる。

第1に、擬口縁部の先端に口縁部粘土帯を乗せるように貼りつける手法である。a手法としておこう。この手法においては、接合面が水平に近い場合とやや斜めになる場合がある。

これにはいくつかのバリエーションがある。接合に使用した粘土がやや余って下に鋭く突出するように作られるもの（a-1手法、第1図1）、接合部の外面に断面三角形の突帯を貼りつけるもの（a-2手法、第1図6～8）、きっちり接合してきれいに屈曲した形態に仕上げるもの（a-3手法、第2図3）などがある。いずれにしても擬口縁部の先端は口縁部の下端と接合して見えなくなっている。

第2に、擬口縁部の先端からやや内側に入った位置に乗せるように貼りつける手法である。b手法としておきたい。この手法では擬口縁部の先端が器の中に入ってしまうことがなく、舌状・鰐状の突帯として口縁部下端に残ることになる（第1図3、第2図1・2）。

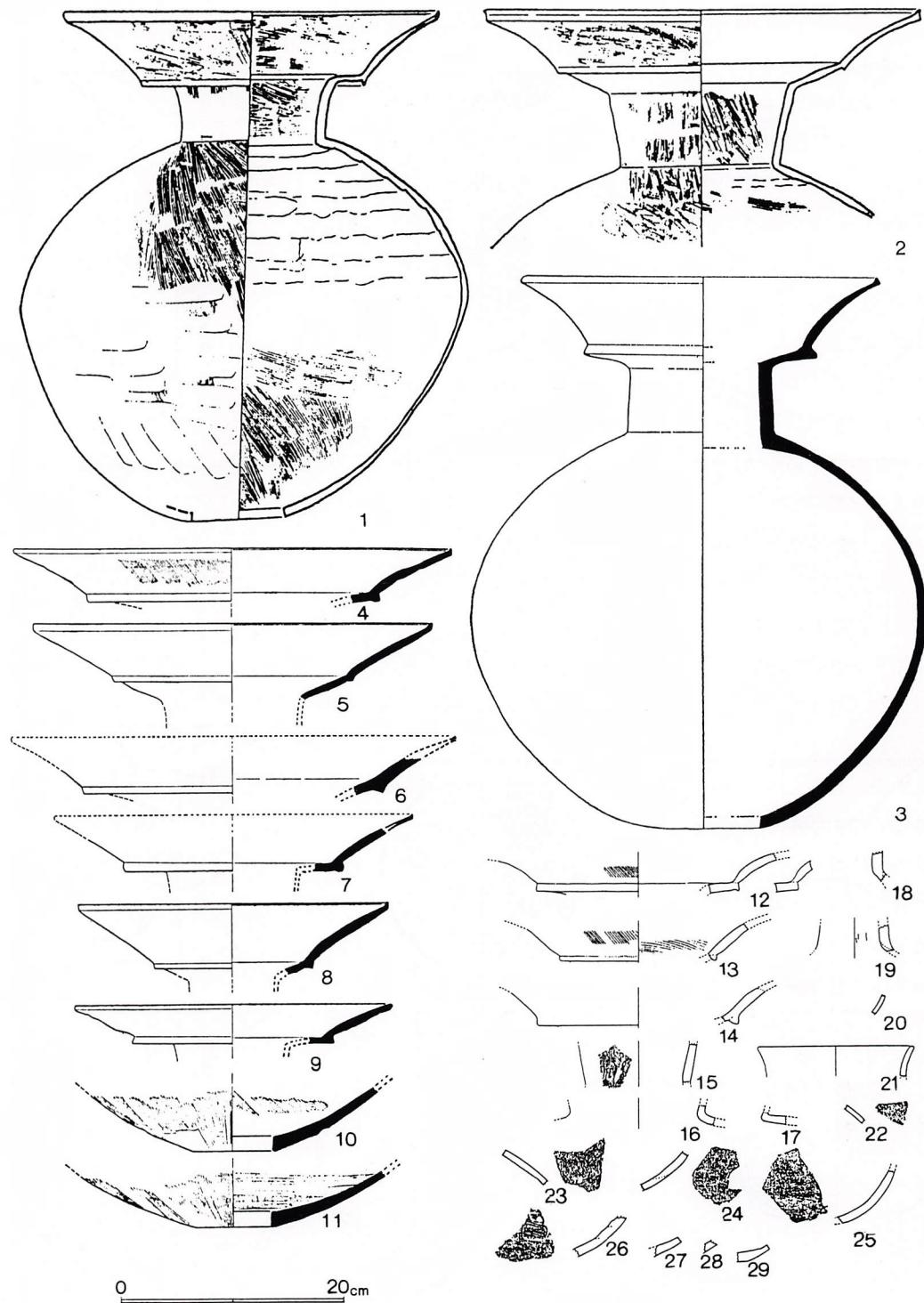
この二つの手法は、図示したように、a手法は奈良県桜井市箸中山（箸墓）古墳、桜井茶臼山古墳、京都府山城町椿井大塚山古墳、b手法も桜井茶臼山古墳からそれぞれ出土した壺形土器にある（註3）。これらの古墳は常に古墳時代前期の最も古い段階の一群に位置付けられているから、a・b両手法とも古墳時代型の二重口縁壺の最古段階からあると考えてよいだろう。北部九州の大分市浜遺跡（註4）においてもa・b両手法による二重口縁壺が近接する地点から出土している例がある（第2図1～3）。正確な意味では共伴ではないが、それに準ずるものと思われる。また、a-2手法とb手法の中間形態にあるような二重口縁壺が大阪府高槻市島田遺跡から布留式（中）段階あたりの土器群とともに出土している（註5、第2図7～10）。ゆえに、この手法をもって土器の前後関係を決めるのは困難であるが、より新しい段階にはb手法による壺は目立たなくなる傾向がある。a・b両手法によって選択的に口縁部接合をおこなう段階からa手法に統一されるようである。またa手法の中では（a-1・a-2）→a-3という時間的序列はあるようであるが、a-2手法はやや新しい段階まで残存する。

### 3. 口唇部成形について

次に、よく取り上げられることであるが、口唇部の成形について考えたい。これには、次の4つの形態がある。

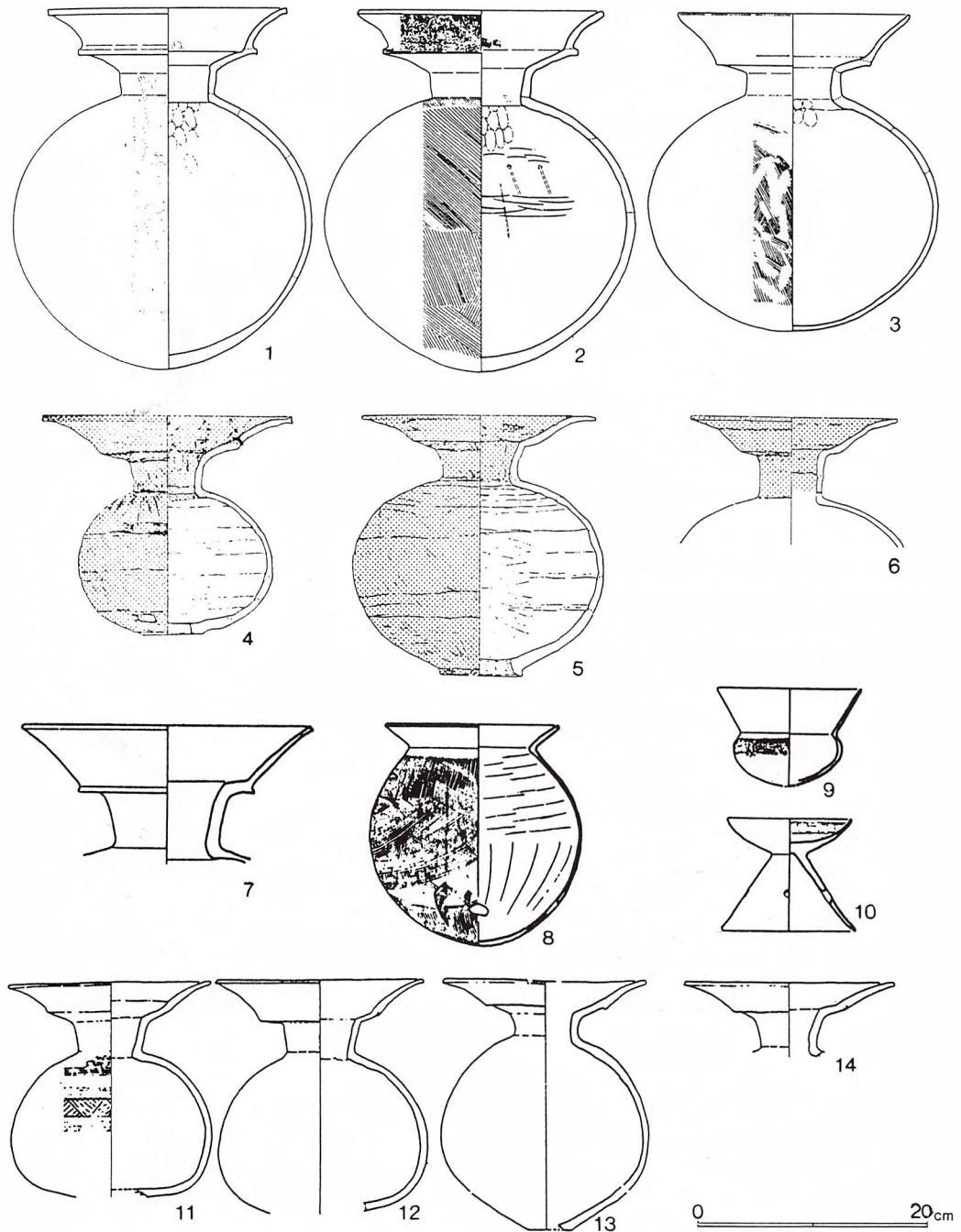
第1に、口唇部を内側に屈折させ、外側に幅の狭い面を作出する形態である。これを $\alpha$ 型とする。これには、上方に屈折させ端部を尖らせるもの（ $\alpha$ -1型、第1図1・4・8など）、内側に強めに折り込まれるもの（ $\alpha$ -2型、第1図3）がある。

第2に、口縁部を先端に向かって細らせ、口唇部を自然に尖らせるものである（第2図5・11～14など）。これを $\beta$ 型とする。口縁部全体の成形・調整に規制されるためか、口縁部の外反度が大きく、長く伸びるものが多い。



第1図 二重口縁壺の典型例(1) (縮尺1:6)

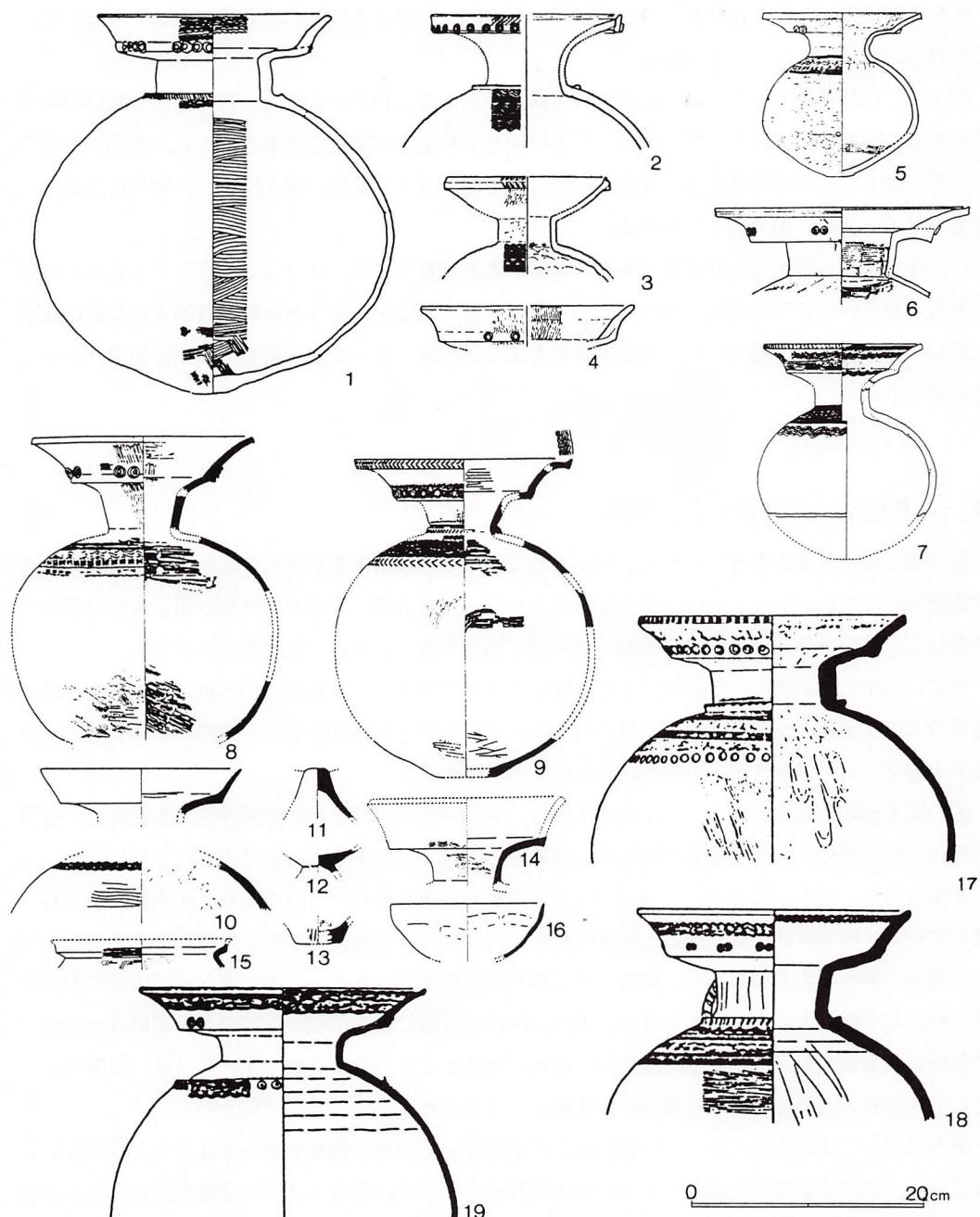
1・2 奈良県箸中山古墳 3~11 奈良県桜井茶臼山古墳 12~29 京都府椿井大塚山古墳



第2図 二重口縁壺の典型例(2) (縮尺1:6)

1~3 大分市浜遺跡 4~6 東松山市下道添遺跡2号墓 7~10 大阪府高槻市島田遺跡 11~14 千葉県市原市神門3号墳

第3に、口唇部を丸く仕上げるものである。これをγ型とする。これにも若干のバリエーションがある。口縁部が外反度の弱い作りになり、口唇部だけゆるくつまみ出して強く外反させ、水平に



第3図 庄内式土器系統の二重口縁壺 (縮尺1:6)

- 1 佐賀県西一本杉遺跡ST-008古墳 2~4 市原市神門5号墳 5 神門4号墳 6 群馬県高崎市鈴ノ宮遺跡1号墓  
7 奈良県能峰南山遺跡8号台状墓 8~16 京都府城陽市芝ヶ原古墳 17・18 大阪府美園遺跡 19 大阪府東奈良遺跡

近く作り出すもの ( $\gamma$ -1型、第3図7、第4図3・4)、口唇部のつまみ出しがより強く端部が細まるもの ( $\gamma$ -2型)、口唇部のつまみ出しがより強く端部は下方に反りかえるもの ( $\gamma$ -3型)などがある。狭義の古墳時代型二重口縁壺にはならないかもしれないが、佐賀県神埼郡東脊振村西

一本杉遺跡ST-008古墳出土の壺（註6、第3図1）のような庄内式系統の壺はこの類型に近く口唇部が丸い。

第4に、口唇部の上下から強く指ないし工具で押さえて強いナデを施し、外側にやや鋭い面を作出するものである。これを $\delta$ 型とする。平らな面を斜め上方に向けて作るもの（ $\delta-1$ 型、第2図7、第3図5）、平らな面を水平方向に向けて作るもの（ $\delta-2$ 型、第6図4）、中央に沈線が入るもの（ $\delta-3$ 型、第4図7）がある。

この中では、 $\alpha$ 型が最古の形態であり、 $\gamma$ 型が最新形態である。 $\alpha \rightarrow (\beta \cdot \delta) \rightarrow \gamma$ という変遷を考えられるが、 $\beta$ 型は北部九州に多く、 $\gamma$ 型は吉備・山陰・北陸などの各地域独自の二重口縁壺に多い。したがって、畿内的な土器を主眼に考えなければ、 $\gamma \cdot \delta$ 型も新しい段階に限定されることは必ずしもいえない。

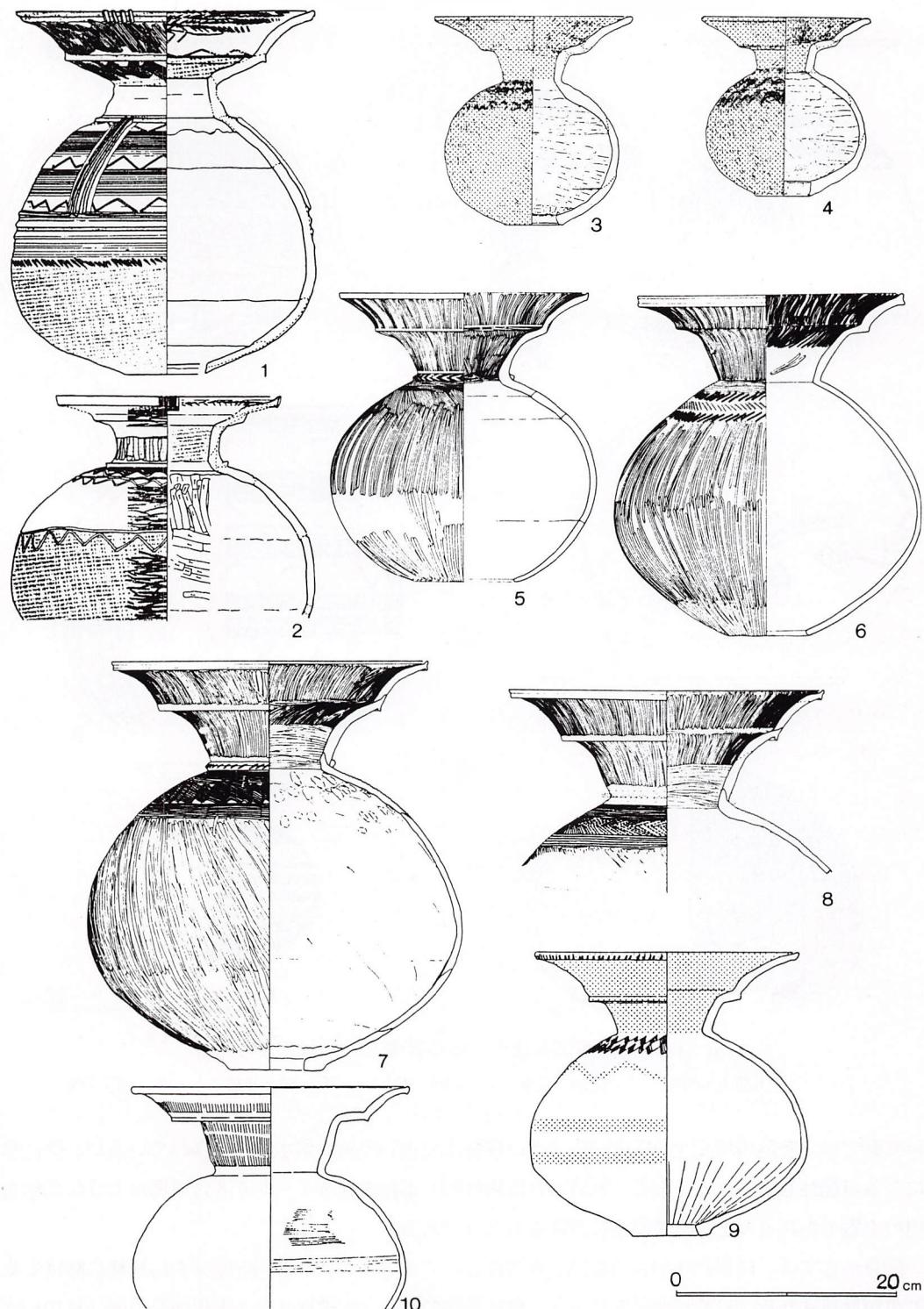
#### 4. いわゆる「装飾壺」との関係

前二章で最も特徴の顕著な口縁部を中心として、二つの類型化を試みた。これ以外にも頸部突帯や底部形態などからいくつかの分類をすることが可能であるが、小稿では紙数が限られているので割愛し、二重口縁壺の各形態が時間軸上で如何に継起するかについて若干考えてみたい。

まず、弥生土器系統の「装飾壺」との比較から始めてみよう。「装飾壺」とは、ここでは主に東海系の欠山式土器・元屋敷式土器に見られるパレス・スタイルの壺形土器と畿内系の第5様式・庄内系土器に特有の装飾される壺の系統にあるものを取り扱う。

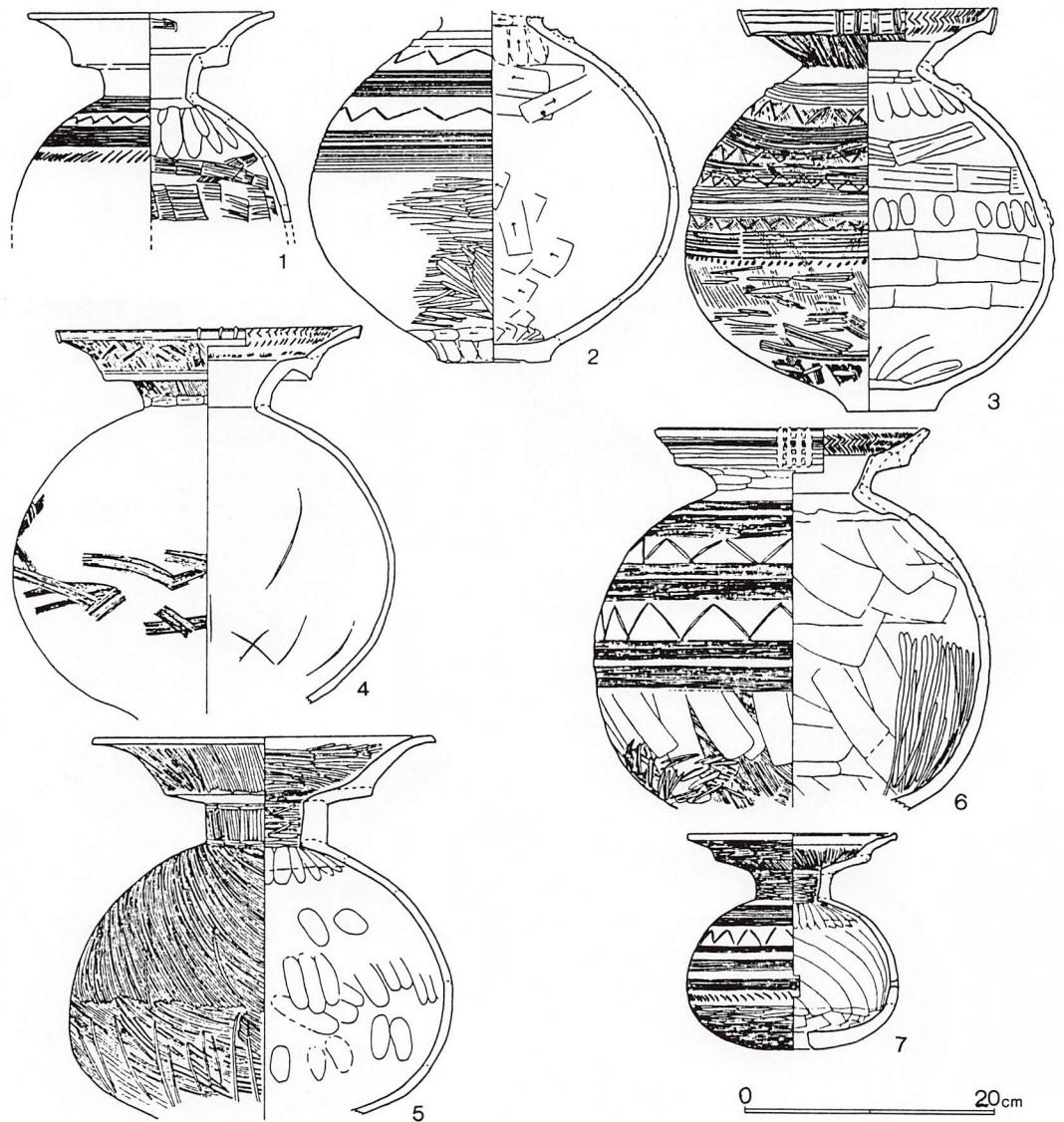
庄内式系統から考えてみよう。庄内式土器の二重口縁壺は、口縁部に櫛描波状文を施し、竹管円形浮文を貼付して加飾するものであり、口縁部接合は $a-3$ 手法、口唇部成形は $\gamma$ 型に近い。この $\gamma$ 型成形は、おそらく畿内第5様式の二重口縁壺から継承されたものであり、庄内式段階でも一貫している。櫛描波状文は2段以上施されたり、内外面に施されたりする。竹管円形浮文も上1列、下1列の2列を配する例がある。胴部上半に櫛描文を施す例もある。弥生の第5様式段階の壺に竹管円形浮文を貼付する例が若干あるが、大方、庄内式段階に装飾が強まっていき、布留式との境目で急速に無文化するようである（註7）。なお、装飾がまだやや多く残る庄内式（新）段階のものとして大阪府美園遺跡・東奈良遺跡の例を図示しておいた。

畿内においては庄内式以降にこの類型にある土器はいくつかの例外を除いてほとんど残らないようである。奈良県能峰南山遺跡の8号方形台状墓出土の二重口縁壺（註8）は櫛描波状文および横線文を口縁部内外面に施し、口唇部に刻み目をつける。竹管円形浮文は失われており、口唇部成形 $\gamma-1$ 型となっている。布留式段階に残る庄内系装飾壺の一例である。また、京都府城陽市芝ヶ原古墳の壺（註9）は、口唇部成形 $\delta-1$ 型のものと、 $\alpha-1$ 型のものの2点がある。前者は口縁部下端に竹管円形浮文、胴部上位に櫛描文の文様帶をもつ。後者は口唇部外面に刺突の綾杉文、内面に櫛描波状文、口縁部下端に櫛描波状文と竹管円形浮文、頸部と胴部の境に刻み目突帯、胴部上位に下端を綾杉文で区画された櫛描波状文帶をもつ。これらは庄内系装飾壺が最も加飾される段階に属し、しかも後者に $\alpha$ 型の口唇部成形が認められることから庄内式（新）段階になる。註9の1987



第4図 東海西部系統の二重口縁壺(1) (縮尺1:6)

1・2 高崎市貝沢柳町遺跡 3・4 東松山市下道添遺跡13号墓 5・6 高崎市倉賀野万福寺遺跡1号墓  
7・8 高崎市元島名將軍塚古墳 9・10 高崎市元島名遺跡

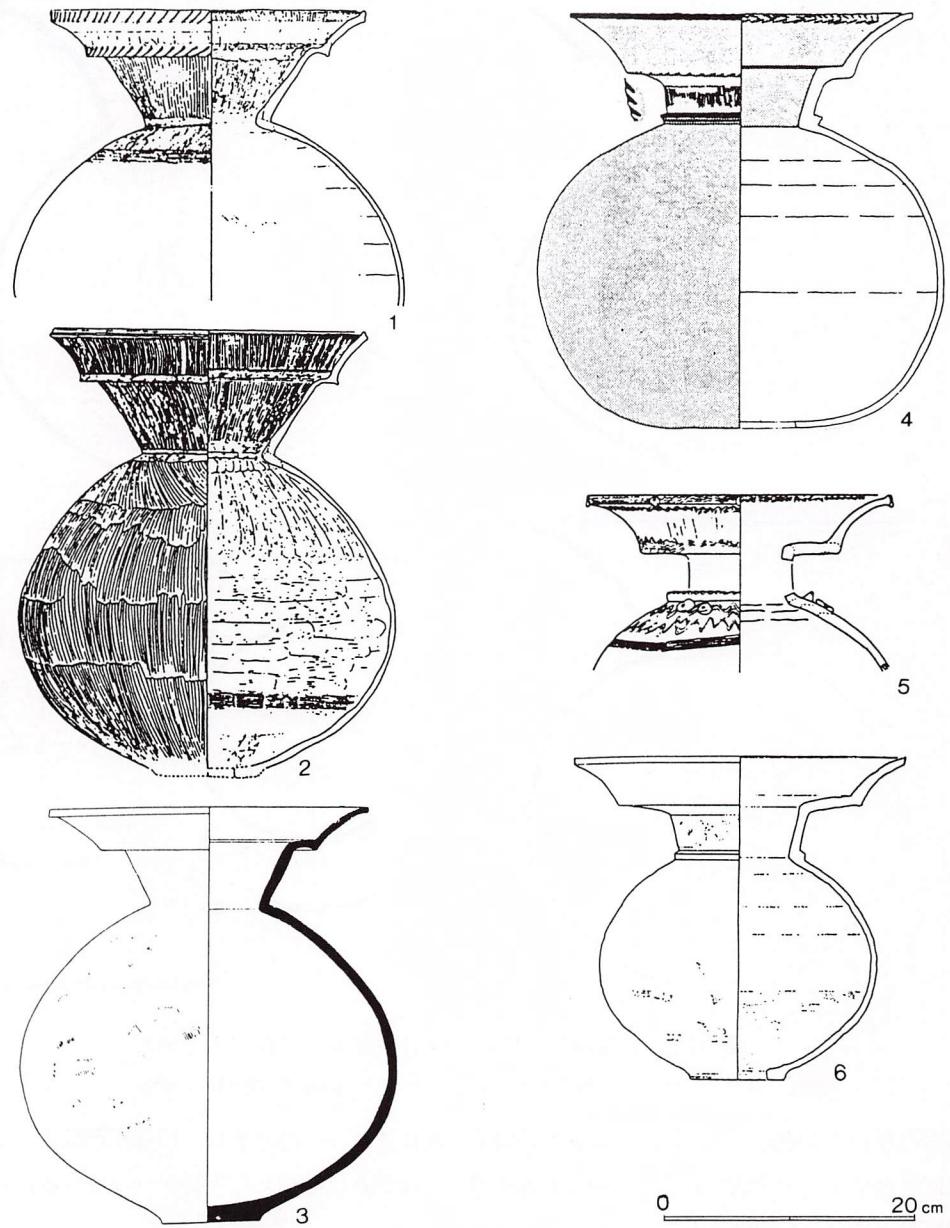


第5図 東海西部系統の二重口縁壺(2) (縮尺1:6)

1・2 小玉郡美里町南志渡川遺跡5号墓 3 同4号墓 4・5 同2号墓 6・7 同1号墓

年文献では「箸墓古墳出土の庄内式の二重口縁壺より古い段階に属する」とされているが、併行期になる可能性もある。ところで、前述した佐賀県西一本杉遺跡S T - 0 0 8古墳例のような北部九州の土器でもほとんど庄内式段階におさまるようである。

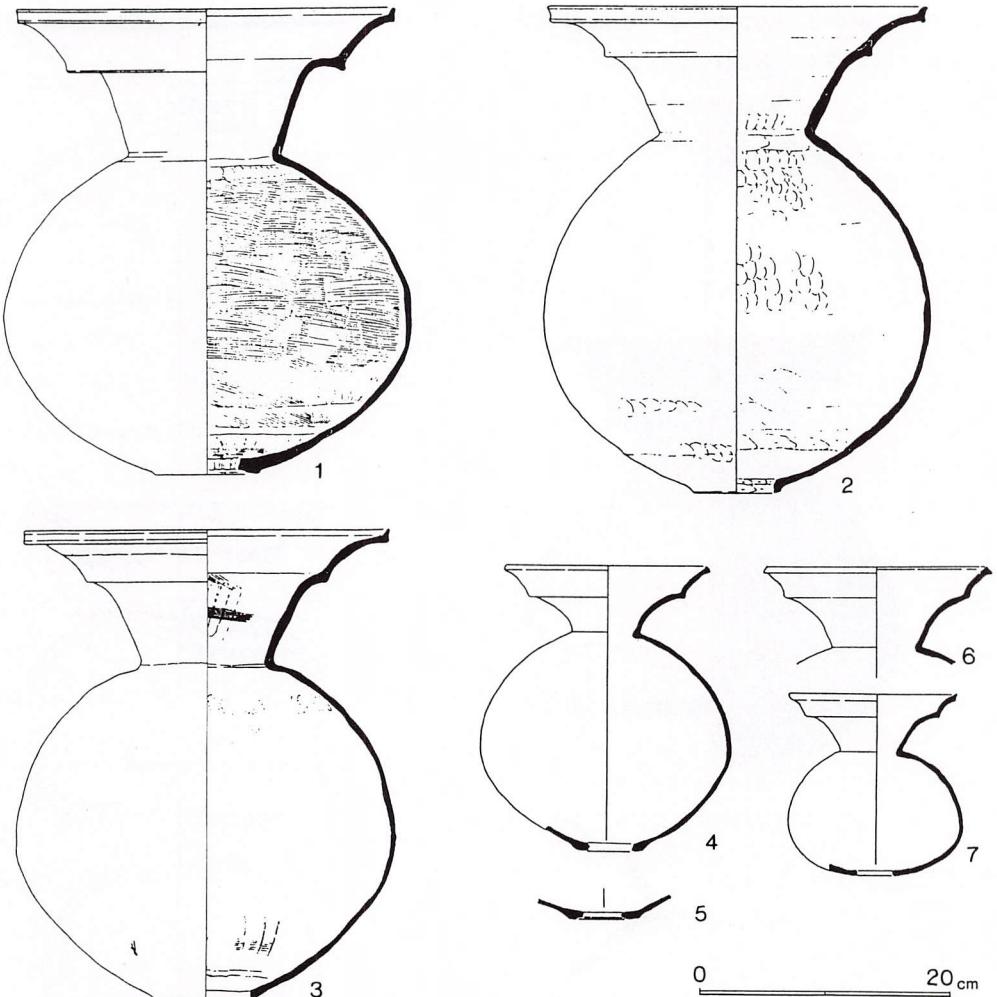
関東地方では、口唇部成形 $\alpha$ 型ないし $\delta$ 型になってしまい、竹管円形浮文を口縁部に貼付するものが散見される。いくつか例を示そう。群馬県高崎市鈴ノ宮遺跡1号方形周溝墓の壺（註10）は、口縁部をかなり分厚く作るものであるが、2個1単位の竹管円形浮文を貼付する。この貼付位置は口縁部外面下端よりやや上がった部分である。口縁部接合 $a-3$ 手法で、口唇部成形 $\alpha-1$ 型である。口唇部の面には浅い沈線がある。いわゆる「出現期古墳」として有名な千葉県市原市神門4



第6図 東海西部系統の二重口縁壺(3) (縮尺1:6)

1・2 静岡県焼津市小深田西遺跡2号墳 3 千葉県沼南町北作I号墳 4 栃木県宇都宮市茂原愛宕塚古墳  
5 千葉県市原市番後台遺跡 6 東松山市諏訪山29号墳

号墳の壺（註11）は、口唇部形成δ-1型の二重口縁であり、突出気味の小さな平底を有する。口縁部接合はa-3手法のようだが、小型の割りに器壁の厚い土器なので、頸部から口縁部まで連続マキアゲしているかもしれない。胴部上端に櫛描横線帯に挟まれた波状文帯がある。なお、口縁部のみの破片であるが、隣接地に所在する神門5号墳には、γ型類似の口唇部成形で、口縁部下端に竹管円形浮文をまばらに付ける壺がある（註12）。栃木県芳賀郡芳賀町谷近台遺跡の壺（註13）も



第7図 東海西部系統の二重口縁壺(4) (縮尺1:6)

1~3 三重県松阪市深長古墳 4~7 三重県津市坂本山6号墳

器壁の厚い小型の壺で、竹管円形浮文を口縁部下端にまばらに貼付する。口唇部形成δ-1型、口縁部接合はa-3手法である。頸部と胴部の境目には刻み目を加えた突帯がつけられる。このほか同様の土器がいくつある。

これらの中では神門5号墳例が明らかな庄内式段階であることを除くと、庄内式段階に繰り入れられるものは神門4号墳例に可能性を見出せるのみである。頸部の作りがむしろ第5様式段階に近く、突出底風平底は庄内式の特徴であろう。口縁部・口唇部の作りがやや新しい点から時期を下降させるとしても庄内式(新)段階にはおさまるだろう。鈴ノ宮・谷近台例などは口縁部の特徴からは古い時期に固定することはできず、共伴する土器から見ても布留式段階に下らせて考えた方がよいであろう。その他の土器もおおむね布留式段階に下降しそうであり、他器種における外来系土器の様相もこれを支持するであろう。

次に東海西部系統の装飾壺に移ろう。パレス・スタイルの壺の系統に属するものであるが、ごく

普通に「パレス・スタイル」とされる口縁部外面に横線文と棒状浮文の施される壺から漸移的に変化したと思われるものと、口縁部は「有段口縁」になっているが、胴部にパレス壺系の文様帶をもつものがある。田口一郎氏の「パレス・スタイル壺の末裔たち」（註14）の分類においては、前者がA形式、後者がB形式およびC形式である。A形式は、口縁部外面に横線文と棒状浮文を有し、頸部以上を分厚く作るため、本稿で扱う有段口縁形態の二重口縁壺に近い形態の土器はごく少数である。したがって、ここでは主としてB・C形式の壺について述べておこう。

高崎市貝沢柳町遺跡1号墓の壺（註15、第4図1）は2～3段の櫛歯刺突の綾杉文を口縁部内面に施し、擬口縁部の内面には突線と鋸歯文、胴部上位から中位の外面には横線と鋸歯文を3回繰り返す文様帶をもつ。胴部上端には1条、下部に3条の突線を巡らして文様帶を区画し、さらに突線3条の縦区画突線をもつ。口縁部接合a-2手法、口唇部形成 $\alpha$ -1型のややゆるくなつたもので、口唇部外面には4本1単位の棒状浮文を3単位分貼付する。頸部が円錐台形になり、胴部が下膨れになる点は明らかに畿内系と東海系の折衷土器である。同じ遺跡の2号墓には胴部の横線文が省略され、口縁部内面の綾杉文も1列になる壺がある。口縁部接合a-3手法、口唇部成形 $\alpha$ -1型であるが、口縁部全体が矮小化しており、やや新しい。埼玉県児玉郡美里町南志渡川遺跡の方形周溝墓群からもB形式壺が何点か出ている（註16）。5号墓の壺は2点あるが、二重口縁の口縁部が残存する第5図1は胴部上半に横線文-鋸歯文-横線文の構成で下端に左下がりの長い刺突を連続する刺突文帯で区画する文様帶をもつ。口縁部は分厚く、内面に突線の痕跡が残り、口縁部接合a-3手法、口唇部成形 $\gamma$ -1型である。胴部上端には突線はない。もう1点（第5図2）は、口縁部を欠くため、本稿で取り上げている「二重口縁壺」ではないかもしれないが、胴部上端に2条の突線、その下に鋸歯文-横線文-鋸歯文-横線文の文様帶を有する。下膨れで平底の胴部である。1号墓の壺は小型で胴部下半に小さな孔を穿つ。口縁部接合a-3手法、口唇部成形 $\delta$ -2型で、胴部には横線文4条と鋸歯文1条の文様帶を有し、下端に右下がりの刺突文帯を施して区画する。下膨れで丸底の胴部である。2号墓の壺は無文化しており、口縁部に装飾を残すものと、ノーマルな古墳時代型二重口縁壺が共伴している。この装飾壺は、口唇部外面に3本1単位の小さな棒状浮文を施し、口縁部内面には綾杉文が施される。また、口縁部の下端は鋭く突出し、A形式の器形上の特徴も引き継いでいる。

貝沢柳町遺跡1号墓の壺は胴部文様帶が幅広で、口縁部の作りなどから見ても元屋敷式（新）段階と考えられる。おそらく、布留式（古）段階併行期にはなっているであろう。2号墓の壺もやや新しいもののほぼ同じ段階になる。南志渡川遺跡の土器は変遷観に田口一郎氏と坂野和信氏の異なる二つの見解（註17）がある。これは4号墓と1号墓のパレス壺の新旧の見方の相違に基づいていいるが、型式以下の細別段階についての議論である。私見では、これらは同じ段階に置きたい。口縁部形態を度外視した場合の、幅広の文様帶をもつ一群と幅狭の文様帶の一群の二つの系譜で考え、1・4・5号墓と2・6号墓の2段階とし、2号墓を布留式（古）段階の最新期としておきたい。

これら以外に、田口一郎氏が「伊勢型二重口縁壺」（註18）としたものの中にも装飾壺がある。まず、高崎市元島名将軍塚古墳には胴部上半に横線文-波状文-横線文の構成の文様帶をもつ壺が10個体以上、横線文-綾杉文-横線文の構成の文様帶をもつ壺が1個体出土している。やや下膨れ

気味の球形胴で、焼成後穿孔の平底であり、頸部と胴部の境目に刻み目を入れる突帯をもつ。口縁部接合  $a - 3$  手法であるが、擬口縁部の端部も  $\delta - 2$  ないし  $3$  型に近い作りをした上に積み上げるようである。口唇部成形は  $\delta - 3$  型である。これも元屋敷式段階、布留式（古）段階併行期であろう。「伊勢型二重口縁壺」には無文化したものが多く、群馬県内には特に集中する傾向がある。代表的なものとして高崎市倉賀野万福寺遺跡 1 号墓（註19）の一群を図示しておく。器形・手法の特徴は元島名将軍塚古墳とよく似ているが、擬口縁部端部の作りや口縁部のプロポーションなどからやや後出的である。高崎市元島名遺跡（註20）の櫛描波状文と赤彩の鋸歯文・横線文で胴部を装飾する壺も無文化系列である。口縁部・擬口縁部の作りは貝沢柳町遺跡の壺に酷似し、後出するものと思われるが、頸部形態から「伊勢型」と考えたい。

千葉県東葛飾郡沼南町北作 I 号墳（註21）の二重口縁壺も元島名遺跡などと同じ系列に並ぶと思われ、静岡県焼津市小深田西遺跡 2 号墳（註22）、三重県松阪市深長古墳（註23）、津市坂本山 6 号墳（註24）などの壺に先行するであろう。小深田西・深長・坂本山例はいずれも布留式（中）段階に下るが、元島名・北作は布留式（古）段階のやや新しい時期と見てよいであろう。頸部突帯をもつ一群も装飾の多い千葉県市原市番後台遺跡（註25）、頸部突帯の刻み目・口縁部内面の櫛描波状文・口唇部外面の刻み目のみを残す栃木県宇都宮市茂原愛宕塚古墳（註26）、無文化した東松山市諏訪山29号墳（註27）のような変化を考えてよければ、前二者は布留式（古）段階の古い一群、後者は布留式（古）段階の新しい一群とすることができる。（未完）

（註1）古墳時代前期初頭の外来系土器の出土について一方向的交通を想定する見解を提唱する論考には次のようなものがある。

梅沢重昭 1988 「群馬県」 『シンポジウム関東における古墳出現期の諸問題』 学生社

高橋一夫 1983 「関東地方における非在地系土器出土の意義」 『草加市史研究』第 4 号

高橋一夫 1984 「前方後方墳の性格」 『土曜考古』第10号

赤塚次郎 1992 「東海系のトレース」 『古代文化』第44巻第 6 号

（註2）桐原 健 1968 「二重口縁をもつ土器の系譜と性格」 『考古学研究』第57号

（註3）箸中山古墳・桜井茶臼山古墳・椿井大塚山古墳から出土した壺形土器（壺形埴輪）について図示された文献は次のとおり。小稿の図もこれらから抜粋した。

中村一郎・笠野 肇 1976 「大市墓の出土品」 『書陵部紀要』第27号

中村春寿・上田宏範 1961 『桜井茶臼山古墳』 奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告書第19冊

置田雅昭 1988 「古式土師器研究—最初の布留式土器—」 『天理大学学報』第 157 輯

近藤義郎ほか 1986 『京都府山城町椿井大塚山古墳』 京都府山城町埋蔵文化財調査報告書第 3 集

柳本照男 1986 「近畿・布留式土器の動向」 『三世紀の九州と近畿』（檀原考古学研究所附属博物館編） 河出書房新社

柳本照男 1991 「土師器・須恵器」 『古墳時代の研究 8 古墳II 副葬品』 雄山閣

（註4）真野和夫・渋谷忠章ほか 1980 『浜遺跡』 大分県教育委員会

（註5）柳本前掲（註3）1986文献

（註6）松尾吉高 1983 「西一本杉遺跡」 『西原遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 3  
佐賀教育委員会

ST-008 古墳には取り上げた壺以外にも口縁部外面や胴部上端外面に櫛描波状文を施す壺の破片があるが、口縁部の作りの特徴からは時期差を見積もれるものではない。おそらく一貫した祭祀行為に使用された土器群であろう。一括して庄内式（新）段階と考えておきたい。

(註7) この点に関しては下記論文に詳細な分析がある。

蒲原宏行 1989 「北部九州出土の畿内系二重口縁壺—その編年と系譜をめぐってー」『古文化談叢』第20集 発刊記念論集（中）

美園遺跡・東奈良遺跡の壺の実測図はこの論文の第11図（P. 68～69）から転載した。

(註8) 楠元哲夫ほか 1986 『能峰遺跡群（南山編）』 奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第43冊

(註9) 高橋美久二・奥村清一郎ほか 1987 『鏡と古墳—景初四年鏡と芝ヶ原古墳』 京都府内巡回展示図録  
埋蔵文化財研究会 1988 『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』 第25回埋蔵文化財研究集会資料集  
報告は、近藤義行 1987 『芝ヶ原古墳』 城陽市埋蔵文化財調査報告書第16集において行われているが、未見のため小稿では上記の二文献によって記述する。

(註10) 田口一郎ほか 1978 『鈴ノ宮遺跡』 高崎市文化財調査報告書第4集

(註11) 田中新史 1977 「市原市神門四号墳の出現とその系譜」 『古代』第63号

(註12) 田中新史 1984 「出現期古墳の理解と展望—東国神門五号墳の調査と関連してー」 『古代』第77号

(註13) 橋本澄朗ほか 1989 『古墳出現のなぞ』 栃木県立博物館

谷近台遺跡の庄内系二重口縁壺は写真のみ掲載されているので、小稿の挿図には入れていない。

(註14) 田口一郎 1987 「パレス・スタイル壺の末裔たち」 『第3回東海埋蔵文化財研究会「欠山式土器とその前後」研究・報告編』

(註15) 久保泰博ほか 1986 『貝沢柳町遺跡』 高崎市文化財調査報告書第74集

(註16) 菅谷浩之・岡本幸男 1986 『美里町の古墳』 『美里町史 通史編』 美里町

(註17) 坂野和信 1988 『下道添遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第67集

(註18) 田口一郎 1981 『元島名将軍塚古墳』 高崎市文化財調査報告書第22集

(註19) 平岡和夫ほか 1983 『倉賀野万福寺遺跡』 山武考古学研究所

(註20) 五十嵐至・五十嵐信・白石 修 1979 『元島名遺跡』 高崎市文化財調査報告書第6集

(註21) 滝口 宏ほか 1963 『印旛・手賀』 早稲田大学考古学研究室

(註22) 埋蔵文化財研究会（註9）文献

(註23) 増田安生 1988 「三重県松阪市深長古墳出土の二重口縁壺」 『マージナル』No.9 愛知考古学談話会

(註24) 小玉道明ほか 1970 『坂本山古墳群・坂本山中世墓群発掘調査報告』 津市教育委員会

(註25) 藤崎芳樹 1982 『市原市番後台遺跡・神明台遺跡』 千葉県文化財センター

(註26) 久保哲三ほか 『下野 茂原古墳群』 宇都宮市教育委員会

(註27) 増田逸朗・坂本和俊ほか 1986 『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県県史編さん室